特集

ようこそ 脳波モニタリングの世界へ

救急医療や神経集中治療の現場において，脳波モニタリングの必要性が高まっています。その背景には，脳波モニタリングにて診断できる非けいれん性てんかん重積（NCSE）の存在がありますが，近年，米国臨床神経生理学会（ACNS）から Critical Care EEG terminology 2021の診断コンセンサスが発表されたことで，より確実な NCSE の診断が可能となってきました。また，検査機器，とくに脳波計の進歩も大きく，ICU や救急外来に持ち運び，安定して長時間の測定ができるようになりました。ヘッドセット型の脳波計も上市され，より簡便な脳波測定が可能となっています。さらには，脳波・動画データをサーバーに記録することで，より長時間モニタリングを行うこと，それによりてんかん重積を捕捉することが可能になりました。そして，治療面においても，ここ数年でさまざまなてんかん重積に対する薬剤が登場し，保険適用外ではあるものの，抗てんかん発作薬による治療のエビデンスも報告されつつあります。

このように，救急・集中治療における脳波モニタリングは近年さまざまなアップデートがみられ，さらなる活用が期待されるところです。一方で，救急医の先生方のなかには，脳波モニタリングは少々敷居が高く，臨床現場ではあまり馴染みがないものという認識の方も少なくないかもしれません。だからこそ，今月号では「ようこそ脳波モニタリングの世界へ」と題し，救急医療・神経集中治療における脳波モニタリングに関する最新知見・情報を共有し，興味をもっていただくための特集を企画しました。

具体的には，脳波診断のコンセンサスや脳波計，NCSE に関する最新知識から，検査セットアップの方法，そして病態ごとのモニタリングの実際まで，脳波モニタリングを実践されている若きエキスパートの先生方に解説いただきました。それぞれの施設では，本特集を読んですぐに実践！…は難しいかもしれませんが，本特集をきっかけに脳波モニタリングにアンテナを張っていただくこと，そして読者の先生方の診療の幅の拡大につながることを，期待しております。

特集企画ゲストエディター：東京女子医科大学附属足立医療センター脳神経外科・てんかんセンター
久保田有一